

動の学期から静の学期へ

(2学期終業式校長挨拶より)

終業式にあたり、一つお話しします。

静の学期についてです。静かなという漢字の静、静の学期です。

2学期は動から静への学期といたしました。そして3学期は、静の学期、進路志望達成に向けて、一人静かに燃える学期ということをお話しました。

実際、今はもう、静の学期です。そこで、

静の学期を有意義に過ごすために一つ、俳句を紹介します。

みなさんには、1学期に学問の夏の句として、西東三鬼の句、

『算術の少年しのび泣けり夏』を紹介しております。

この句は、頑張っても頑張っても一向に成績が上がらず、こんなに勉強してもなぜ分からないのか、自分のふがいなさ、能力の無さに、悔しくて思わず泣いてしまう、そういう少年の姿をうたったものです。

でも、学問の成績なんてものは、なだらかに段々と伸びるものではありません。むしろ階段状で、いつか突然、どんと上がるんです。成績ってジャンプするんです。悔し涙を流すほどに努力を重ねていけば、その内に、どんと上がるということなんです。ということを伝えたくて紹介した句です。いくら頑張っても伸びない、俺には能力がない、なんてあきらめたり、努力を放棄したりしてはいけません。

さて、今回、紹介する学問の冬の句は、大正から平成にかけての俳人山口誓子、24歳、東京大学在学中の作です。

『学問のさびしさに堪へ炭をつぐ』

この句にを読むと、昔、茅屋根の古い家で、それこそ、三好達治の「太郎をねむらせ、太郎の屋根に雪ふりつむ」ようなしんと雪の降る寒い夜にたった一人で寂しく勉強していた頃を思い出します。好きな科目ならまだしも、嫌いな科目のときなんかは面白くないし、さりとてやめるわけにも行かず、寂しさやら孤独やらをじっとこらえて勉強をつづけたものです。寂しくて寒いのか、寒くて寂しいのか、ふと見ると薪ストーブの火は消えそうで、慌てて薪をくべる…。

この句でいいかったことは、学問は、つきつめると自分一人の歩みであり、孤独なもの以外のなにものでもない。学問のさびしさとは学問の道の厳しさそのものであり、その厳しさに堪えてこそ、学問は成る、ここに学問の学問たる所以がある。ということではないでしょうか。

同じようなことを、あの漱石も、話しています。

「人間は何かを成し遂げようと思ったとき、必ずひとりぼっちになるものだ。その孤独が人間を崇高なものにする。」

とても好きなことばです。

さびしさに堪える根性、孤独にじっと耐える根性がなければやはり力は身に付かない、ということです。

生徒のみなさん、特に3年生のみなさん、この冬の寒さの中にあっても、夢を叶える道は、孤独でさびしい道、きびしい道ですが、誰もが通ってきた道ですし、誰もが通る道です。

おそれず、いやがらず、さびしさに耐え、厳しさに耐えて、自分の夢、目標に向かって努力し続けてください。

静の学期、静の漢字に、青と争うがあるのが不思議に思っていました。でも、炎は、完全に燃焼しているときは、赤ではなく、青と聞きます。争うは、その相手が自分の欲望や煩悩です。遊びたいとか、スマホしたいとかそういう葛藤・欲望と争い、打ち勝った後の心の安らかさ、平穏な心が静かなのです。

自分の弱い心に打ち勝ち、完全燃焼するという静の学期、そこでの皆さんのがんばりを心より期待しています。

それでは、みなさん、2学期、そして2015年、お疲れ様でした。

良いお年をお迎えください。

◇ 終業式の前に伝達式を行いました。そのときの挨拶も載せておきます。

ただいま、賞状伝達式で授賞されたみなさん、改めておめでとうございます。

日頃の努力が報われ、喜びもひとしおと思います。

また、表彰されなかった人の中にも、特活から出された資料を見たり、顧問からお話を聞けば、もう少しで表彰だった人や、成長著しく非常に期待できる人もいるということのようですので、その努力に対してもありがたいと思います。

いずれにせよ、3年生が引退して、1・2年主体のチームは、いい形でスタートしているとみて喜んでいます。

こうして伝統が確かに引き継がれていくのでしょうか。3年生のみなさんには、1・2年生への指導に感謝するとともに、安心して進路達成の道を歩んでください。

1・2年生諸君は、右文尚武を実現すべく引き続き、それぞれの分野で、努力をお願いします。

(完)